

加 茂 遺 跡

—第1次・第2次調査の概要—

1993.3

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

加 茂 遺 跡

—第1次・第2次調査の概要—

1993.3

法興石川県埋蔵文化財保存協会



(1) 第1次調査区遠望（西から）



(2) 第2次調査区全景

序 文

本報告書は、建設省による国道8号線のバイパス、通称「津幡北バイパス」建設にかかわる加茂遺跡発掘第1次調査（平成3年度）及び第2次調査（平成4年度）のものである。津幡町加茂遺跡は、加茂廃寺に隣接する弥生時代から古代を主として中世に及ぶ集落跡で、80m幅路線内、延長500mに広がる大遺跡である。第1次、第2次調査は路線西側から進められた。調査は今後更に数年が予定されている。遺跡は河北潟東岸の山麓線沿いの沖積平野、小河谷のつくる自然堤防に立地する標高5m前後に位置する。

第1次、第2次調査により、遺跡は調査区中央に東西方向に走る大溝によって二分され、遺構は掘立柱建物跡の多くが南側で認められ、北側は小溝が多く建物跡は少ない。掘立柱建物跡は奈良～平安期のものを主に27棟、中世4棟が数えられる。他に目に付く遺構として、横板組井戸2基、柵状遺構があった。南北に棟をそろえる建物配置、井戸の存在と共に、大溝出土の270点をこす墨書土器、陶硯、和同開珎銀銭、鈔帯金具、心葉形金具等の出土から、本遺跡が官衙的色彩の濃いものであることを示している。墨書土器中、23点を占める「英太」は加賀国加賀郡の郷名「英太」と一致するものである。本報告書に森田喜久男氏の文献学的考察を掲載している。氏は本遺跡を、(1)英太郷の郷家、(2)郡家・郡役所の支所的施設、郷倉院（院内）、(3)深見駅家の三者の可能性を示唆している。

本遺跡は古い河北潟と丘陵裾を結ぶ古代能登官道に接し、検出された大溝は河北潟へ漕ぎだす舟運の港として水陸交通の要衝であったことを想定させる。和同開珎銀銭や鈔帯金具等、郷長か駅長か郡の下級官僚の身分を示すものであったろう。本遺跡の調査は今後数次を重ねなければならない。真相の明らかになる日のことを期待してやまない。

平成5年3月

社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

理事長 濱岡賢太郎

例 言

- 1 本書は石川県河北郡津幡町舟橋・加茂地内に所在する加茂遺跡^{かも}の第1次・第2次調査の概要報告である。
- 2 発掘調査は、建設省北陸地方建設局が施行する一般国道8号津幡北バイパスに関わるもので、建設省から委託をうけた石川県との委託契約にもとづき、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が実施した。調査および概要報告にかかる費用は建設省が負担した。
- 3 第1次調査は、三浦純夫・藤田邦雄・山川史子を担当者とし、平成3年8月1日から同年12月10日にかけて実施した。面積は4700㎡である。第2次調査は、三浦純夫・久田正弘・沢辺利明を担当者とし、平成4年4月20日から同年12月21日まで実施した。面積は4000㎡である。
- 4 本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳを三浦が、Ⅲを久田が担当し、Ⅴには森田喜久男氏（東京都立大学大学院生）の玉稿を得ている。編集は三浦が行った。
- 5 本遺跡の区割は国土座標軸を基準としており、方位は真北である。水糸高は海拔である。
- 6 現地作業では、津幡町舟橋・加茂区をはじめ、遺跡周辺地区の方々の協力を得ている。深く感謝の意を表したい。
- 7 発掘調査および本書作成の過程において次の各位よりご教示・ご協力をいただいた。記して深く感謝したい。

伊藤 隆三 今津 節生 勝見 孝彦 木下 良 北野 博司 桑野 一幸 小嶋 芳孝
小西 昌志 瀬戸 薫 善端 直 竹田 学 千賀 久 出越 茂和 戸潤 幹夫
東四柳史明 藤井 一二 森 浩一 吉岡 康暢 （五十音順、敬称略）

目 次

	頁
I 序 説	
1 調査の契機と経過	1
2 遺跡の立地と調査の歩み	2
II 調査の概要	
1 調査区の設定について	5
2 遺構の概要	5
3 出土遺物の概要	13
III 横板組井戸について	
1 石川県内の古代横板組井戸の概要	17
2 横板組井戸の特徴と問題点	20
IV 河北潟と周辺の古代遺跡	21
V 北加賀の古代と加茂遺跡	
はじめに	1
一 加賀立国前後の北加賀	1
二 古代における加茂遺跡の地理的環境	2
三 加茂遺跡の性格について	5
おわりに	7

図 版 目 次

巻頭図版

図版第1 第1次調査 空中写真	図版第10 第2次調査 遺 構
図版第2 第1次調査 空中写真	図版第11 第2次調査 遺 構
図版第3 第1次調査 遺 構	図版第12 第2次調査 遺 構
図版第4 第1次調査 遺 構	図版第13 遺 物
図版第5 第1次調査 遺 構	図版第14 遺 物
図版第6 第2次調査 空中写真	図版第15 遺 物
図版第7 第2次調査 空中写真	図版第16 遺 物
図版第8 第2次調査 空中写真	図版第17 遺 物
図版第9 第2次調査 遺 構	図版第18 遺 物

挿 図 目 次

	頁
第1図 調査風景	1
第2図 津幡町の位置	2
第3図 加茂遺跡と周辺の遺跡	3
第4図 加茂廃寺跡出土の瓦塔	4
第5図 調査区の位置	6
第6図 調査区区割図	7
第7図 調査区全体図	9・10
第8図 大溝土層図	11
第9図 第1号井戸実測図	12
第10図 出土遺物実測図	15
第11図 石川県内出土の横板組井戸	18
第12図 加茂遺跡第1号・第2号井戸井戸枠の仕口模式図	19
第13図 河北潟と周辺の古代遺跡分布図	22

表 目 次

	頁
第1表 周辺遺跡地名表	3
第2表 大溝出土墨書土器地区別一覧	13
第3表 石川県内出土横板組井戸一覧	19
表 1 『和名類聚抄』にみえる英多(太)郷	3

I 序 説

1 調査の契機と経過

加茂遺跡発掘調査の契機は、建設省北陸地方建設局金沢工事事務所による国道8号のバイパス建設である。「津幡北バイパス」と名づけられたこの道路は、石川県河北郡津幡町舟橋から同町刈安に至る延長5.8kmで、刈安地内で俱利伽羅バイパスに連結し、富山県小矢部市に至る。

本遺跡にかかる分布調査については、昭和62年10月26日付で、建設省金沢工事事務所より石川県立埋蔵文化財センターに依頼があり、同年11月27日に実施された。また、平成元年4月17日付で2回目の依頼があり、同年9月25日～同27日、同10月26日に行われた。この結果、約80m幅の用地内に延長500mにわたって遺跡が存在することが判明した。その範囲は舟橋と加茂にまたがっている。

遺跡の立地は沖積地と丘陵に分けられ、沖積地では弥生時代～中世の集落が、丘陵では弥生時代の集落が存在すると予想される。沖積地の遺跡は一部で2層にわたっており、下層に弥生時代、上層に古墳時代以降が存在している。ただし、今回報告する第1次・第2次調査の範囲には下層は存在しない。

発掘調査は路線予定地の西側から実施しており、平成3年度に第1次調査、同4年度に第2次調査を実施した。



第1図 調査風景（第2次調査）

2 遺跡の立地と調査の歩み

(1) 位置と環境 (第1～3・5図、図版第1)

加茂遺跡の存在する津幡町は、金沢市の北に位置し、その西側には河北潟が存在する。この潟は、昭和38年から、国の直営事業として大規模な干拓事業が開始され、同45年には干陸された⁽¹⁾。

本遺跡は、この潟の東縁部の沖積地に立地する。現在は干拓され一面に農地が広がっているが、かつては集落の近くまで湖岸が迫っており、本遺跡と河北潟は不可分の関係にあることがわかる。

遺跡は加茂集落の立地する谷あいからの流れによって形成された自然堤防上に立地しており、調査地点の標高は約4mを測る。

周辺における遺跡の分布をみると、いずれも山裾に立地しており、標高は5m前後を測る。本遺跡の南側にはほとんど遺跡は存在しないが、北側をみると、加茂廃寺跡が隣接するのをはじめ、能瀬、領家、御門地内にかけて奈良時代～中世にかかる大きな遺跡の分布がみられる。これらのうち発掘調査を経たものは加茂廃寺のみであるが、いずれの遺跡も散布範囲が広く、河北潟周辺では最も密度の濃い遺跡分布地といえる。

(2) 加茂廃寺跡の調査

本遺跡と密接な関係にあるとみられる加茂廃寺跡の調査の歩みを『津幡町史』⁽²⁾により概観しておきたい。

加茂廃寺跡発見の契機となったのは、昭和33年(1958)に始まった舟橋・加茂地内を流れる舟橋川周辺の畑地の水田化事業であった。その一環として舟橋川の河道を埋めて新しい川の掘削を行っており、この際に遺物が発見されたのである。発見とその後の調査の経過は次のとおりである。



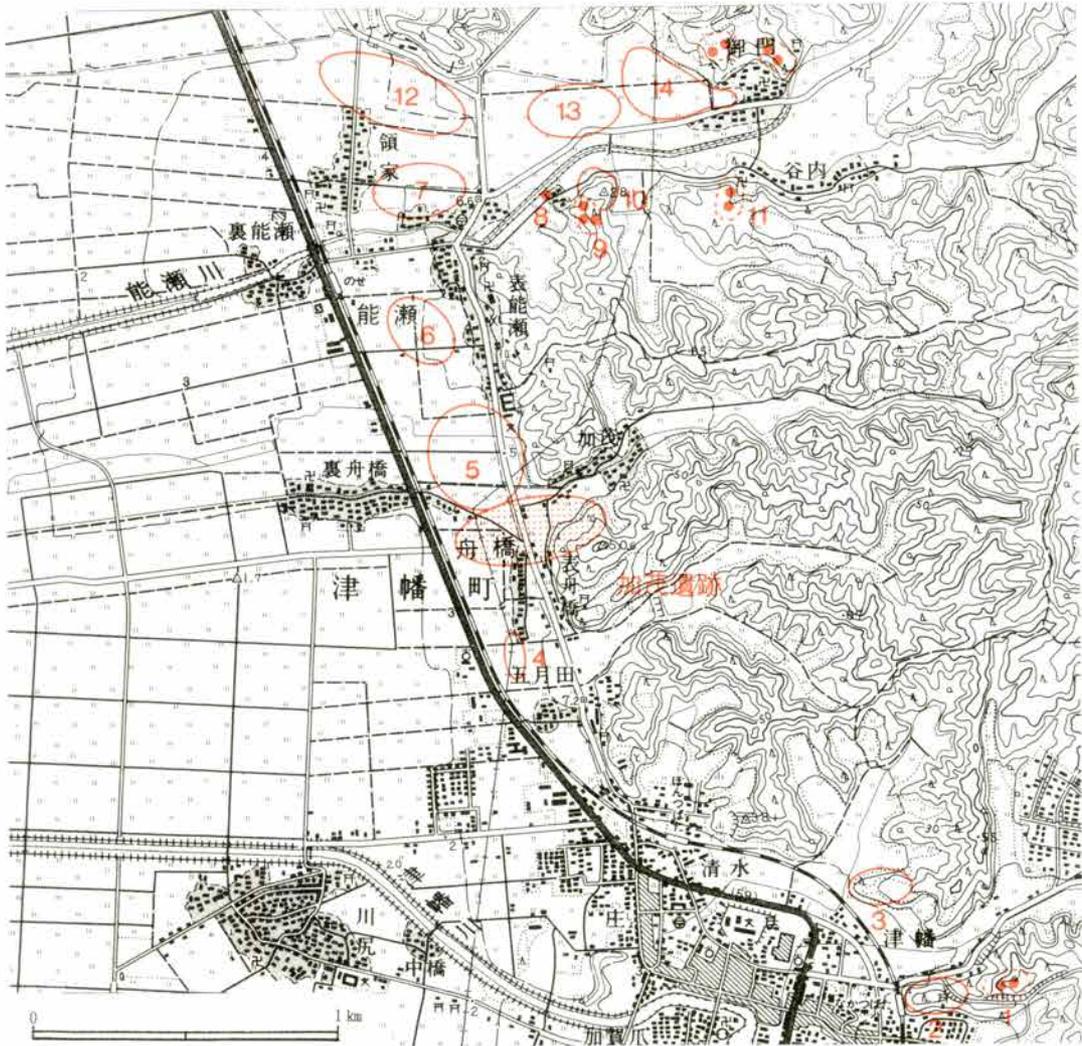
第2図 津幡町の位置 (1/3,000,000)

昭和33年 10月中旬 舟橋川の新河道掘削のさい、土器のほか軒丸瓦、軒平瓦、火鑽臼などが発見される。発見者は津幡町能瀬在住の渡辺恒彦氏で、同氏はこれを浅香年木氏に届ける。

11月9日・23日 浅香年木氏が現地を調査し、高堀勝喜氏に報告する。同氏はこの遺跡を、「加茂廃寺跡」と命名する。

昭和34年 3月22日 加茂廃寺跡で石川考古学研究会の例会が開かれる。

3月28日 第1次調査が実施され、東西2m、南北4mのトレン



第3図 加茂遺跡と周辺の遺跡

(1/25,000)

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	太白台古墳群	古墳	古墳	8	能瀬石山古墳	古墳	古墳
2	津幡遺跡	散布地	古墳	9	谷内石山古墳群	古墳	古墳
3	津幡スワヤマ遺跡	散布地	古墳	10	谷内石山遺跡	集落跡	弥生
4	五月田遺跡	散布地	奈良～中世	11	谷内横穴群	古墳	古墳
5	加茂廃寺跡	散布地	古墳～平安	12	領家ハシバ遺跡	散布地	奈良～中世
6	能瀬遺跡	散布地	弥生～平安	13	御門ジャモチ遺跡	散布地	奈良～中世
7	領家遺跡	散布地	奈良～中世	14	御門遺跡	散布地	奈良～中世

チが入られる。(第5図A地点)。加茂口の16番で瓦塔の屋蓋片が採集される。

4月1日 吉岡康暢氏が現地を訪れ、遺物の採集・実測を行う。

昭和35年 10月9日 第2次調査が実施され、東西1m、南北3mのトレンチより須恵器・土師器約70点、炭化木片が出土する(第5図B地点)。

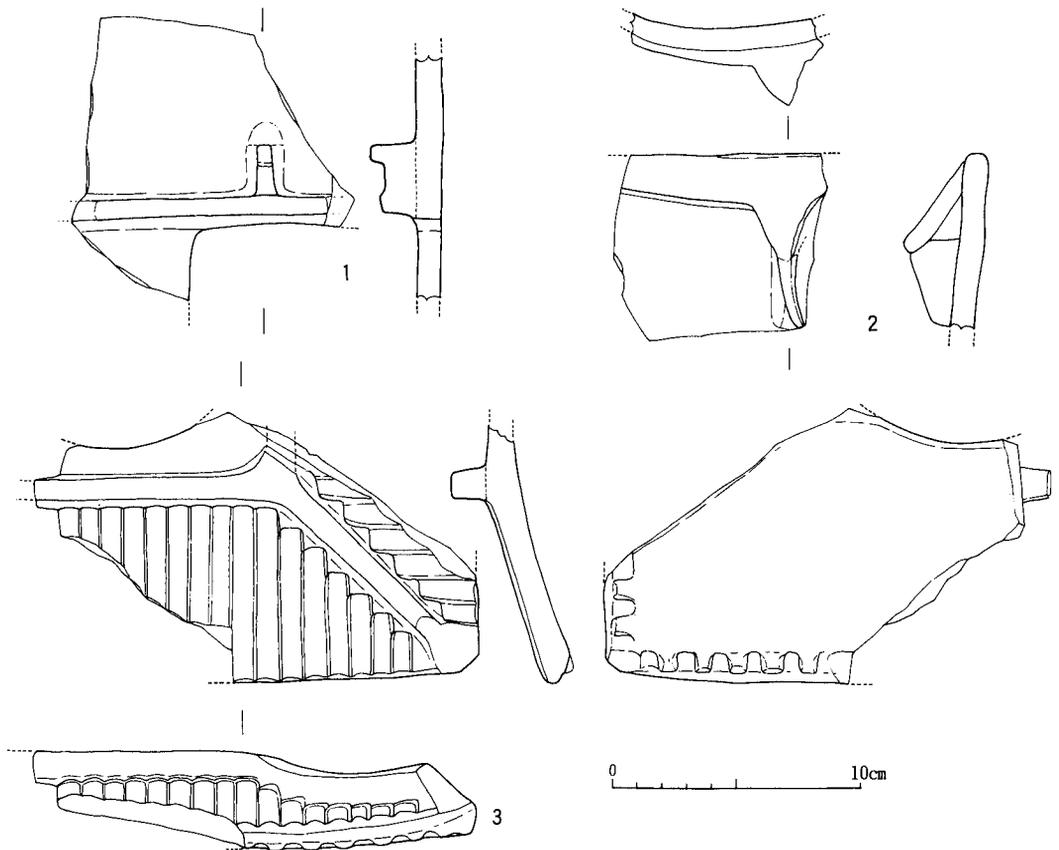
昭和47年 3月21日～同26日 第3次調査が実施される。調査面積は約100㎡。須恵器・土師器約30点が出土。採集品として屋瓦、瓦塔(屋瓦部2片、壁部2片)がある。

(3) 加茂廃寺跡の瓦塔(第4図)

瓦塔は『津幡町史』で図化されていないので紹介しておきたい。屋蓋、軸部が2点ずつ採集されている。いずれも土師質である。1は初層の正面とみられるもので、入口部分があり、長押しとみられるものが表現されている。壁の厚さは1cmである。2は2層以上の軸部であろう。斗拱様の表現がみられる。3は屋蓋部である。隅棟は反りをもつ。中央部の軸木を通す穴の復元径は、11.6cmである。

注

- (1) 干陸前は南北約8km、東西約4kmを測る日本海側有数の潟湖であった。
- (2) 吉岡康暢「平安後期地方寺院の一例」『津幡町史』 津幡町役場 1974 石川県津幡町。



第4図 加茂廃寺跡出土の瓦塔

(1/3)

II 調査の概要

1 調査区の設定について（第6図）

南北を国土座標軸に合わせて、10m四方を一区画とした。東西方向に、西からアラビア数字を付し、南北方向には南からアルファベットを付した。呼称は「10E」というようになる。「10ライン」などと呼ぶ場合は、10区の10m幅全体を指すものとする。

2 遺構の概要（第7図、図版第2・7・8）

検出した主な遺構には、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、大溝、柵状遺構、小溝群がある。

調査範囲のなかで遺構の配置をみると、南西部を除いては密度が高い。大溝が東西方向に走っており、遺構配置はその北と南に二分される。北側には小溝が目立ち、掘立柱建物跡は少ない。これは、調査箇所と面積に起因するもので、遺構はさらに北へ伸びている。

南側には小溝群が少なく、多くの掘立柱建物跡がみえる。南端部では中世の建物もみえる。遺構は4ラインより西側、Aライン以南には広がってはならず、南西部に遺跡は伸びていないことが分かる。

(1) 掘立柱建物跡（図版第3・9・10）

奈良・平安時代のものと中世のものがある。

奈良・平安時代では、2間×1間（桁行×梁間、以下同じ）が4棟、2間×2間の総柱建物が8棟、3間×2間が13棟、4間×2間が1棟、4間×3間が1棟ある。ただし、3間×2間は建て替えが多く、さらに何棟か増える可能性がある。方向は、4間×3間の1棟を除いて南北棟である。

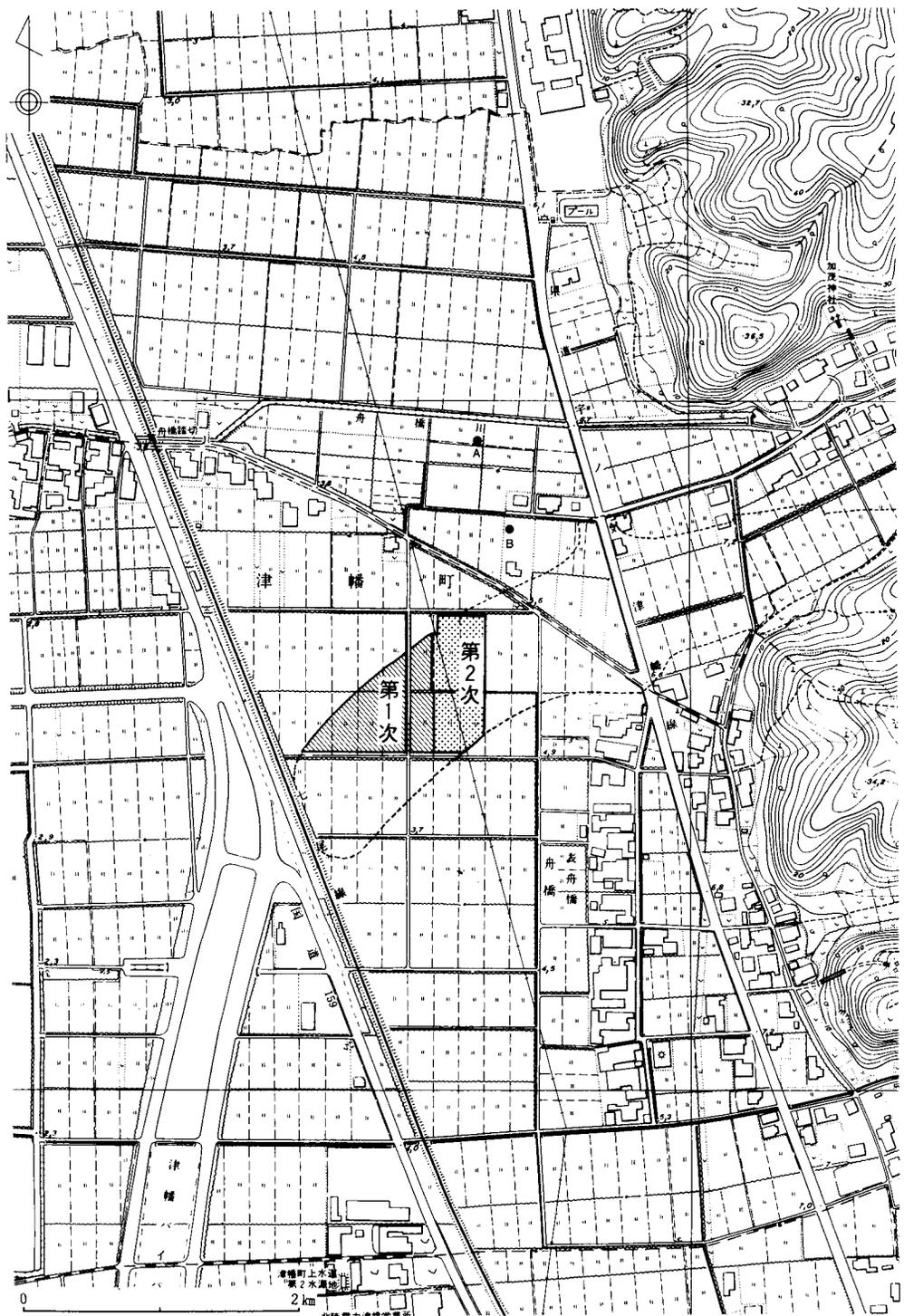
中世では、2間×2間が1棟、3間×2間が2棟、5間×4間が1棟ある。

さて、奈良・平安時代の掘立柱建物跡は平面的にみると、次のように分けられる。

(a) 大溝の南で、7C～7E区に存在する3棟の建物群である。これは両側に区画溝を備えており、この中で展開したものと考えられる。切り合いにより、少なくとも二時期あることがわかる。

(b) 大溝の南で、12C・D区の東西棟を核とした、国土座標軸に平行する建物群。これには、13・14B区の2間×2間の建物が付随するとみられる。11E・F区の2間×1間の建物群や、10F区の2間×2間建物跡は軸を同じくするが、11～14・E区の柵状遺構によって画される可能性がある。

(c) 13F・G区の4間×2間建物を中心とする、桁行を国土軸よりやや西へ振った建物群である。これは、調査区のなかでは最も建物の密集した場所で、建て替えも多い。4間×2間の南に



第5図 調査区的位置

(1/5,000)



第6図 調査区區割図

(1/2,000)

ある桁行柱列を揃えた3間×2間、そして、東にあって南側梁間柱列を揃えた3間×2間と、その南で桁行柱列を揃えた3間×2間、そして、4間×2間と梁間柱列を揃えたその西にある2間×2間もこれらの群とみなしうる。

(d) 大溝北の建物群で、3間×2間が3棟みえるほか、梁間2間のものが1棟みえる。この群中には、横板組の井戸もみられる。

以上、平面的に4群に分けたが、これらのなかには建て替えがあり、各群のどの建物が併存するのかは、建物個々の时期的な検討にまたねばならない。掘立柱建物跡における通有の例にもれず、本遺跡でも明確に時期を決定しうる資料は少ない。時期別の建物の変遷は、整理の進捗をまって改めて検討したい。

(2) 大溝 (第7・8図、図版第5・12)

6 F区から14 I区にかけて検出した。8 G区以東の主軸はN-75°-Eである。本遺跡の中を東西方向に走って、南北二つの生活空間を形成している。第2次調査までに検出した延長は約90 mである。最大幅は約5 m、最小幅は2 mで、4 m前後の平均幅をもっている。この溝は新旧二つの時期に大別される。古い時期は7世紀初頭で、このあとやや時間を置いて8世紀前半(第2四半期)～中頃から再び機能している。このあと連綿と10世紀初めまで続く。なお大溝の中、あるいは肩部においてこれに関連するような遺構はみられない。

第8図に示した14ライン西端部の土層図によって大溝の一端を窺ってみよう。旧溝が埋まったあと、この北側を掘り込んで新しい溝がつくられていることがわかる。検出面での深さは、旧溝

が70cmで、新溝は50cmである。

新溝の第1層・第2層は褐色の砂質土層で、第3層は黄灰色の砂層である。第4層は茶褐色の砂質土層である。旧溝の第1層は炭化物を多量に含む黒褐色の砂質土層、第2層は黄灰色の細砂層、第3層は灰褐色の強い粘質土、第4層は灰褐色の砂層である。地山は黄灰色の強い粘質土層である。

これによって、新溝は、旧溝が埋まったあと一定の時間をおいて掘られたものとみられる。12ライン西端部では、旧溝の上に、遺物を含まない黄灰色の砂質土層がいったん堆積した間層的状况が窺える。したがって、新溝は8世紀前半代に旧溝の位置を意識しつつ、新たに掘削されたものとみられる。

出土遺物には、須恵器、土師器のほか木製品、植物遺体がある。木製品は曲物の底板などが中心で、量的に多いとはいえない。須恵器のなかには文字資料が多くある。墨書が圧倒的に多いが、漆書も少量ながら存在する。

(3) 井戸跡（第9図、図版第3・4・11）

第1次調査で横板組の井戸枿をもつものが1基（10H区）、第2次調査では横板組が1基（13I区）、素掘のものが2基（13D区）検出されている。横板組の井戸は2基とも大溝の北で検出されており、近くの建物（3間×2間）に付随するものとみられる。いずれも底板をもつ構造であるのが注目される。

横板組井戸

第9図は10H区で検出された第1号井戸である。東西160cm、南北200cmの長方形の大きな掘り方があり、このなかにさらに、東西135cm、南北130cmの隅円方形の掘り方が穿たれており、方形に井戸枿が据えられている。井戸枿の内法は、上端で東西75cm、南北68cmで、深さは検出面より152cmを測る。底面は東西66cm、南北67cmで、ほぼ正方形となる。底板を含めて全体的に北に傾斜している。枿板の外側四隅には杭状の木が打ち込まれて補強されている。横板の枚数は検出時で東西が6枚、南北が7枚である。また、底板は4枚である。材はいずれも同種で同一の木とみなしうるもので、枿材の長さは110cm前後、厚さは2.5～3.0cmである。幅は10.5～30cmまでである。底板に「鼻繰り穴」とみられるものがある。

出土遺物には、井戸内および掘り方からの須恵器、土師器がある。掘り方出土の須恵器より、この井戸の構築時期を8世紀末～9世紀初頭にかかる頃とみておきたい。

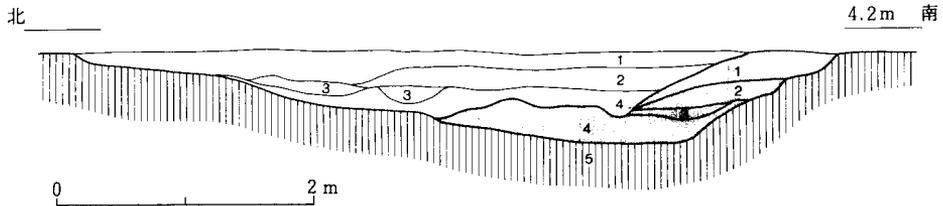
第2号井戸は、13I区の建物の南で検出された。検出面での掘り方上端は、東西260cm、南北220cmを測る。井戸枿の内法は上端で東西85cm、南北95cm、底面で東西105cm、南北100cmを測る。深さは検出面より110cmで、側板上端からは90cmである。

この井戸には四隅に板材はみられない。底板は、不揃いな材を2段に重ねた状態で、上に3段、下に3～4段ある。

井戸枿内側の出土遺物では、須恵器、土師器のほか、底近くで種子を主体とする多くの植物遺



第7図 調査区全体図



第8図 大溝土層図 (14ライン)

(1/60)

体がある。掘り方からは、須恵器、土師器が出土している。底板下面の土器より、8世紀後半の構築とみておきたい。

なお、この井戸の底板より1.2m下位で、古い時期の底板とみられる板材群を検出した。したがって、第2号井戸は最初のものより浅い位置に作り替えられたものとみられる。

井戸枠の仕口については、第1号、第2号とも端部の上下に方形の切り欠きを入れた板材を、組み合わせており、この方法は石川県内の横板組井戸では通有のものである。

素掘井戸

13D区内の西にあるのが第3号、東にあるのが第4号である。いずれも1m余りの上径をもつ略円形で、深さは第3号が60cm、第4号が100cmを測る。2基とも「まなこ」として曲物が使われていた可能性はある。第4号井戸より漆碗が出ている。構築時期は古代とみられるが、中世に下がる可能性もある。

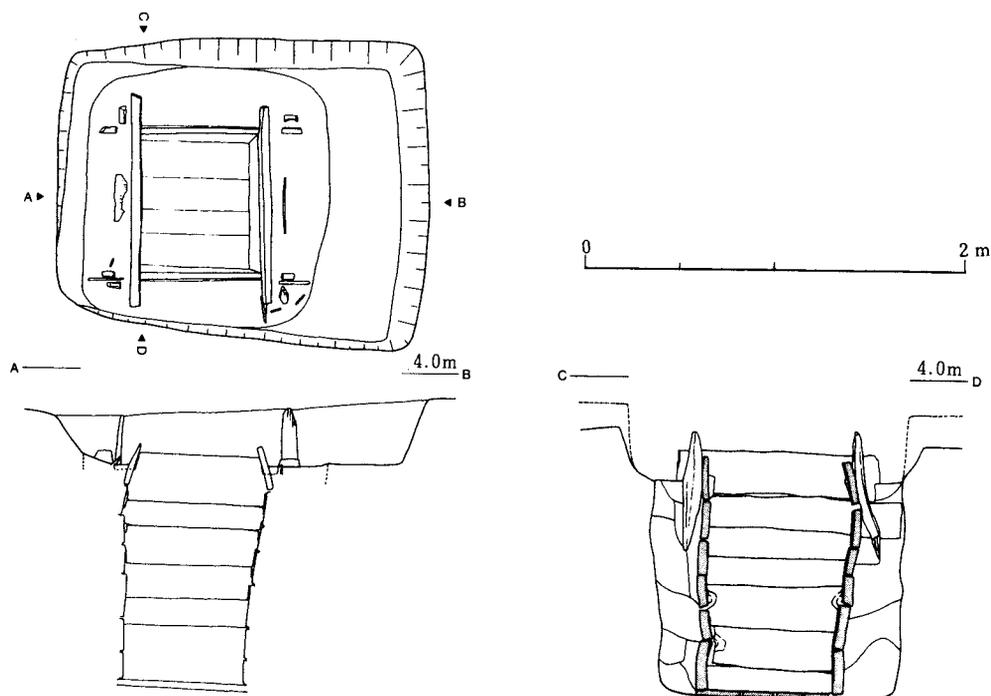
(4) 柵状遺構

径30cmの掘り方に、幅約20cm、厚さ約5cmの板材を立てたもので、大半は長辺を南北にとっている。上部構造は推定しがたいが、柵状遺構として報告しておく。11E～14E区にかけて東西に走行しており、この北に展開する建物群の梁間に平行することより、これらの南を限るものとして機能した可能性がある。一部作り替えがあるとみられるが、3.5～4.5mを基本的な間隔として設けられたようである。

このほか、11～13・H区の大溝の南北肩部にもみられる。

(5) 小溝群 (図版第5)

大溝の北と南に存在するが、群在するものは北側に限られている。一条単位では、幅約30cm、深さ15cm前後で7～8mの長さをもつものが通有である。須恵器、土師器の小片を出土するものの、溝の機能を特定できるものはない。中世の遺物は包含しておらず、古代の所産として捉えられる。小溝群が建物と重なることはほとんどない。



第9図 第1号井戸実測図

(1/40)

3 出土遺物の概要

出土遺物には、須恵器、土師器、陶硯、漆桶、漆椀、軒丸瓦、鈐帯金具、心葉形金具、和同開珎、製塩土器、土錘、木製品、砥石、鉄滓のほか植物遺体がある。時期は7世紀初頭、8世紀前半～10世紀初頭、15・16世紀に大別されるが、大半の遺物は8～10世紀の所属である。

(1) 大溝出土の墨書土器（第2表、図版第13～16）

墨書土器は、調査区全体で、小片も含めると、第1次調査で約150点、第2次調査で約110点確認している。いずれも須恵器である。これらの大半は大溝から出土しており、約85%を占める。

第2表は大溝出土の墨書土器のうち、文字の確認できたものについて、区割にしたがって10mごとに示したものである。出土点数は、10～13区に多いことがわかる。このなかで、11～13区に古い時期（田島明人氏編年⁽¹⁾によるⅢ～Ⅳ期）の文字が集まっているのは、近接する建物の時期と関わる可能性がある。本遺跡のキーワードである「英太」をみると、6ラインに11点と集中するほか、10～13ラインに1～2点ずつ散見される。

「英太」は『和名類聚抄』にみえる加賀国加賀郡の郷名「英太」⁽²⁾と一致するもので、郷名を示すものとみなしてよからう。英太郷の郷域については明確にしえないが、この資料は本遺跡がこの郷域に含まれる可能性を示している。「英太」を記す土器は、大溝で17点、大溝以外で6点出土している。

人名とみられるものに「五百足」と読みうるものがある。「五百」とみえるものも出土してお

第2表 大溝出土墨書土器地区別一覧

区画	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
文字と点数	[英太] 11 [千] 1 [茂] 2	[家] 1 [南] 1 [千] 1 [茂] 2	[茂] 1	[丸] 1 [英太] 1 [千] 1 (10と接合)	[砦] 1 [英太] 1 [鴨嶋鶏英] 1 [] 1	[大毛*] 1 [英太] 2 [郷] 1 [茂] 2	[丸] 1 [五百カ] 1 [五百カ] 1 [足] 1 [真継] 1 [英太] 1 [] 2 [] 1	[砦] 1 [五百カ] 1 [五百カ] 1 [足] 1 [飛カ] 1 (12と接合) 1	[丸] 1 [砦] 1 [英太] 1 [山替] 2 [五百カ] 1 [山三] 1 [] 1	[方見] 1 [丸] 1 [福] 1 (13と接合)

り、「五百足」の略とも考えられる。「鴨」以下5文字がみえるもの（図版第15右上）は習書と考えたい。「飛」のような字を多く書いたもの（図版第15下段）も習書とみなすことが可能であるが、明確に文字と認められるものはなく、さらに検討を要する。本遺跡に特徴的な文字としては、前記の「英太」のほかに「真継」がある。

土器の時期については、^⑧「大毛*」「□□（五百カ）」「□□足（五百足カ）」が8世紀後半、「方見」「砦□」は8世紀中頃とみられる。「英太」は8世紀中頃から9世紀前半までみられ、『和名類聚抄』の初見より大きくさかのぼることとなった。「真継」「丸」は9世紀初めから9世紀後半、「家」は9世紀初め、「鴨嶋□英□」「福□（福主カ）」は9世紀前半、「山三」「山替」や「飛」字様の習書や「南」は9世紀後半、「茂」は9世紀後半～10世紀初めとみられる。

これらの墨書土器を器種や部位別にみると、無台の坏身の外底に書かれたものが最も多く、ついで有台坏身の外底が多い。両方で約85%を占めている。

(2) 大溝以外の墨書土器

「正月」「田人」「千」「秋□」「丸」「英太」「真継」などの文字を確認している。

(3) 漆書土器・漆附着土器（図版第17）

漆あるいは漆状の付着物のあるものを紹介しておく。

漆書文字では「上」と書いたものが大溝13区より1点出ている。無台坏身の外底である。また、記号的なものとして「+」が3点、「-」が2点確認されている。いずれも須恵器に書いたものである。

漆附着土器は須恵器、土師器合わせて約100点ある。点数は須恵器が多い。器種は坏身が多いが、蓋も少量ある。部位は内面がもっとも多く、外底、外側面もある。第2次調査では土師器甕の内面に付着したものが10点以上出土している。須恵器坏身の中には、明らかに漆容器として使用されたものも確認できる。また、割れ口に付着したものは接着に用いられたものとみられる。

(4) 陶 硯

円面硯が1個体出ている。陸の周縁に堤をもつ有堤式⁽⁴⁾と呼ばれるもので、堤は外縁より低い。三角形の透かしをもち、台脚は透かしの下部で終わっている。硯面径13.2cm、堤径10.0cmを測る。9世紀後半の所産であろうか。

(5) 転用硯（図版第16）

29点ある。硯として使用した痕跡の認められるものは17点であるから、残りのものは正確には墨付着土器と言うべきであろう。使用痕のあるものは坏蓋内面が10点、有台坏身外底が7点である。墨付着の器種は坏蓋と有台坏身、無台坏身であるが、坏蓋内面がもっとも多い。墨の容器、あるいは筆を整えるために用いられたものもあろう。

(6) 漆 桶（図版第17右下）

曲物の底板に漆紙状の付着がみられるもので、漆液を入れた桶として報告しておく。厚さ1.7mm、底板径約13cmの小型品で、残存長は6.0cmである。外底は平坦で木目を残している。木取りは柁目である。内底には漆紙が収縮して付着した状況がみえる。10F区包含層の出土である。曲物桶による漆の貯蔵を示す例は、石川県内では、金沢市戸水C遺跡⁽⁵⁾に例がある。

(7) 軒丸瓦（第10図、図版第18）

瓦当である。上半部を欠く。現存幅11.8cmを測る。左右にやや長い円形で、周縁の幅は、下部で2.1cm、右側で1.5cmと一様ではない。周縁は二段につくる。外区には連珠文が配される。内区は圏線で画され、唐草文がみえる。中央には中房が低くみえる。背面は周縁部にナデ、中央部にケズリがみられる。厚さは周縁、中房とも2.4cmである。胎土には白色砂粒を少量含み、焼成は良い。灰色～灰白色を呈する。

過去に加茂廃寺跡で採集された軒丸瓦をみると、中房のないものや、唐草文のないものもある。既報⁽⁶⁾の4点と比較すると、基本的な文様構成や寸法は同じであるが、同範とみられるものはない。

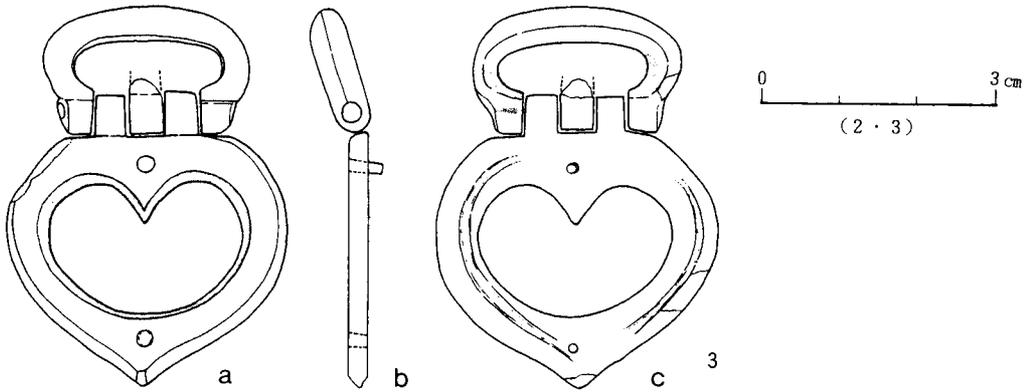
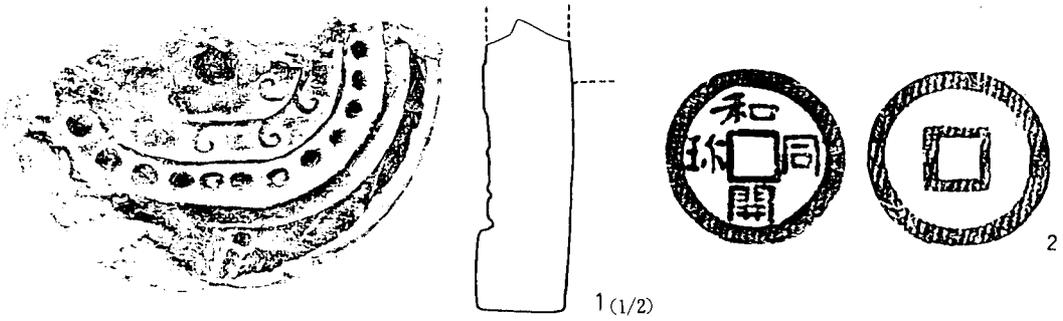
(8) 金属製品・銭貨（第10図、図版第18）

鍔帯金具 大溝の9G区から出土した巡方である。漆の付着が一部にみられる。縦2.2cm、横2.5cmである。

心葉形金具（第10図3） 8D区の包含層より出土した。心葉形のくり抜きをもつ円環部に鉸具がとりつけられたものである。全長5.04cm、円環部の幅3.65cm、厚さ2.50cm、鉸具の幅2.71cm、厚さ5.00cmを測る。円環部には2ヶ所に鉸の痕跡がある。表面は内・外縁ともに面取りがなされておき、内縁には漆の付着がみられる（図中アミ部分）。裏面は平たく、幅1cmの溝がある。裏面全体に接着剤としての漆状のものが看取できる。鉸具部は刺鉄の先端を欠いている。

形態的には杏葉に近似することより、その可能性も考えられるが、寸法が小さいため検討の余地がある。

和同開珎（第10図2） 銀銭である。13F区の包含層より出土した。直径2.4cm、厚さ0.16cm、重さ6.4gで、鋳上がりは良く、銭文も明瞭である。外縁の幅が広い。字体は、「開」を「開」に



第10図 出土遺物実測図

(1/1・1/2)

つくるいわゆる不隸開である。銀銭の出土例をみると不隸開が多い。

和同開珎銀銭の出土地は、管見の限りでは日本国内で22ヶ所・39枚、中国で1ヶ所・5枚を数える。地域的にみれば、奈良県がもっとも多く、ついでその周辺地域となっている。

なお、本資料については、非破壊による蛍光X線分析を実施した結果、銀の含有率が99%を超えていることが明らかになった（奈良県立橿原考古学研究所保存科学研究室長今津節生氏の分析による）。

(9) 製塩土器（図版第18）

ほとんどが大溝の9～14区下層から出土した。器種は尖底と丸底がみられる。丸底のうち形状のわかる1点は、口径約18cm、器壁の厚さ約5mmで、幅1.0～1.5cmの粘土紐のマキアゲによって成形している。また、内面は細かいヨコハケで、外面はマキアゲ痕を残している。ほとんどが薄い器壁である。7世紀初頭のものと思われる。

(10) 土 錘（図版第18）

6種類確認できる。最大のものは長さ11.4cmで、径3.6cmを測り、手づくねの痕跡を残す。これより小型のものには筒形のものとは紡錘形のものがある。

注

- (1) 田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 北陸古代土器研究会 1988 金沢。
- (2) 大東急記念文庫本、那波道門刊古活字版本では「英太」とみえるが、高山寺本、名古屋市博物館本では「英多」と記される（加能史料編纂委員会編『加能史料 平安Ⅱ』 石川県 1985 金沢、名古屋市博物館編『和名類聚抄』 名古屋市博物館 1992 名古屋）。
- (3) 石川県埋蔵文化財保存協会田嶋明人調査課長の教示を得ている。
- (4) 檜崎彰一「日本古代の陶硯」『考古学論考』 平凡社 1982 東京。
- (5) 平川 南「戸水C遺跡漆紙文書」『拓影』第35号 石川県立埋蔵文化財センター 1991 金沢。
- (6) 吉岡康暢「平安後期における地方寺院の一例」『津幡町史』 津幡町役場 1974 石川県津幡町。

Ⅲ 横板組井戸について

1 石川県内の古代横板組井戸の概要

石川県内では横板組井戸は9遺跡13例を確認した。以下古代の横板組井戸の構造を中心に紹介する。石川県立埋蔵文化財センター（以下センターと省略）が調査した戸水C遺跡・SE702と大町C遺跡（1992年調査）以外は公表資料であるが、引用文献は紙面の都合で省略する。

津幡町加茂遺跡第1号井戸（第11図1）

石川県埋蔵文化財保存協会1991年調査。井戸枠は東西方向7枚、南北方向6枚の板が存在した。切り込みは1例以外同じ長さのタイプである。南・北辺に第12図最下段例を据えている。底には4枚の板（1枚は転用材）が敷かれていた。

津幡町加茂遺跡第2号井戸（第11図2）

石川県埋蔵文化財保存協会1992年調査。井戸枠は東西・南北方向とも4枚が存在した。南・北辺に第12図最下段例を据えて、西辺は第12図最上段例で、東辺は片側の切り込みが長いタイプの横板で押さえている。2段目以上は切り込みは同じ長さのタイプである。横板の1枚は転用材である。底には底板が2段敷かれており、底板から下1.2mにも底板と思われる板材が存在した。よって深い井戸を浅く作り替えたようである。裏込めには板の削り屑が入っていた。

羽咋市深江遺跡井戸（第11図3）

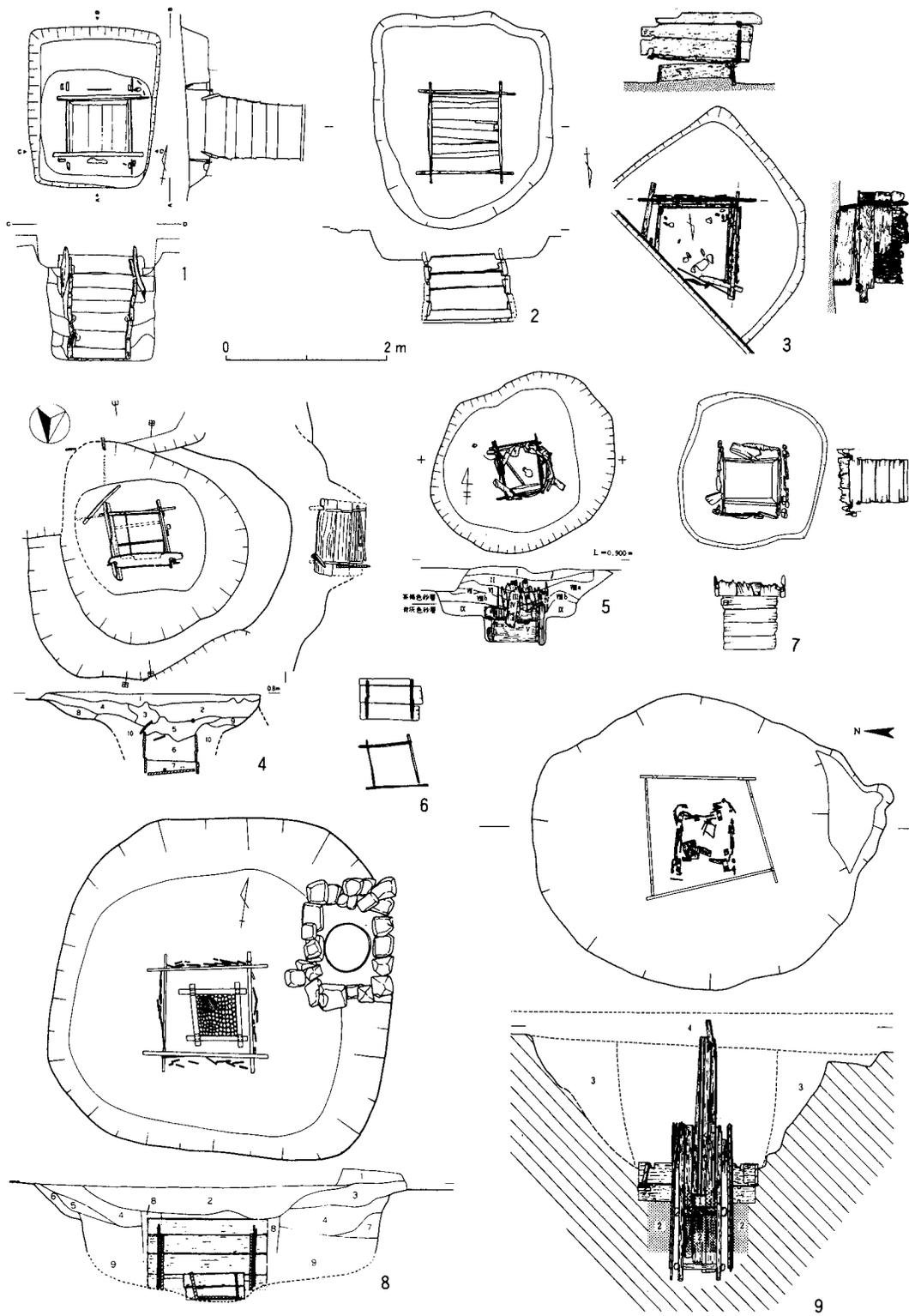
石川県教育委員会1975年報告。井戸枠は二段構造をとっている。下段は横板を方形に4枚設置し、上段は南北・東西方向とも3段の横板が存在した。南辺の最上段は第12図最上段例と同じであり、3段で完結するようである。最下段は第12図例のようにならず、下側にも短い切り込みを持つ。その短い切り込みに長さ1.35m、幅10cm、厚さ4cmの板を組合わせている。

羽咋市寺家遺跡SE02（第11図8）

センター1986・88年報告。井戸枠は二重構造となっている。外枠は東辺5枚あるが、6段（最上段 押さえを含む）以上存在した可能性がある。南北方向に第12図最下段例を据えている。切り込みは両側とも同じ長さのタイプである。補強のためか、縦板が二重に多数打ち込まれていた。9枚の縦板は転用材である。内枠は7枚2段が存在し、東西方向に第12図最下段例を据えている。東辺2段目上の切り込み幅が広いので、この上に押さえ（第12図最上段例ないし板材）が存在したものと思われる。外枠材同様に切り込みは同じ長さのタイプである。

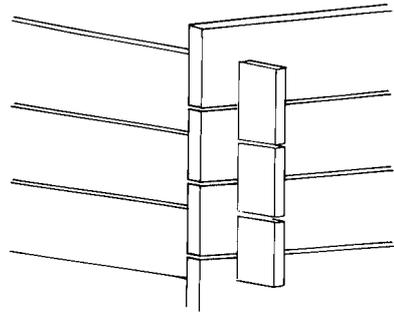
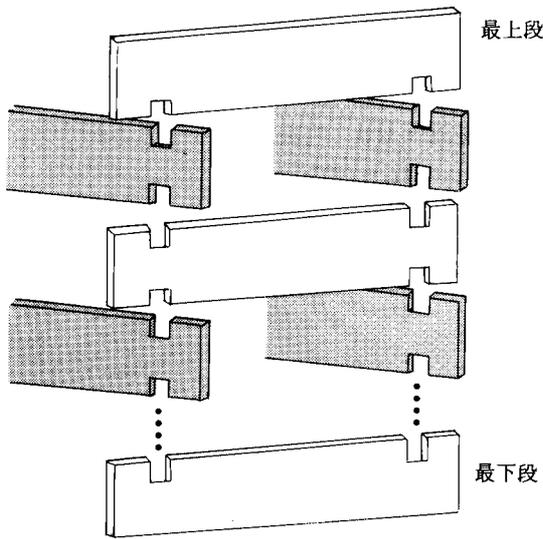
金沢市戸水C遺跡SE702（第11図4）

センター1990年調査。井戸枠は東西方向2枚、南北方向3枚の板が存在した。1段目東辺に第12図最下段例を据えて、南・西・北辺の順番に長い切り込みを連結しながら組み立てる。東・西辺上の短い切り込みに2段目南・北辺の短い切り込みを合わせ、上側に向いている長い切り込み



第11図 石川県内出土の横板組井戸

(1/80)



第12図 加茂遺跡第1号・第2号井戸井戸枠の仕口模式図

第3表 石川県内出土横板組井戸一覧

	遺跡名・遺構名	時期	掘り方 (cm)	内法 (cm)	上部構造	底部構造
1	加茂遺跡第1号井戸	8C末～9C初め	長方形 200×160 隅円方形 130×135	75×68、深さ152 底面 66×67	四隅に柱、縦板組 いあり	板敷一段(4枚)
2	加茂遺跡第2号井戸	8C後半	不整形 260×220	85×95、深さ110 底面 105×100	不明	板敷二段(7～8枚)
3	深江遺跡井戸	10C	略方形 258×(182)	100×100、深さ90 1段目 90×90	縦板が二重	小礫敷、貝殻敷
4	戸水C遺跡SE702	9C中頃	不整形 330×(290)	64×64、深さ100	縦板あり	板敷(2枚)
5	戸水C遺跡F区4号井戸	9C末～10C初め	楕円形 235×200	57×47、深さ88	縦板を多角形	なし(砂層)
6	戸水C遺跡E区2号井戸	不明	不明	50×50、深さ50	不明	なし(砂層)
7	八日市サカイマツ遺跡B地点	8C後半～9C前半	不明 190×175	70×53、深さ80	四隅に柱、縦板組 いあり	なし
8	寺家遺跡砂田地区SE02	9C前半	隅円方形 420×410	外枠 108×104、深さ130 内枠 44×54	縦板などが二重	7cm前後の白石敷
9	千木ヤシキダ遺跡井戸	10C	不整形円形 410×365	125・145×115・140 深さ220、転用前98×105	不明	荒砂敷、その上に木炭 小石敷
10	漆町遺跡フルミヤ地区1号井戸	10C中頃	円形 244×227	83×72(一段のみ)	不明	木片・小礫敷
11	大町C遺跡	9C後半	隅円五角形 192×188	82×73、深さ120	不明	なし
12	飯田町遺跡3号井戸	古代以降	隅円方形 300×290	60(1枚)	不明	丸太くり抜き
13	飯田町遺跡15号井戸	13世紀	隅円方形 182×172	82×82、深さ124	縦板組隅柱横棧どめ	不明

に東・西辺の長い切り込みで押さえる。北辺3段目は第12図最上段例なので、東西方向(南辺未検出)で井戸枠全体を押さえていたと推定される。1段目の南・西・北辺は長い切り込みを対角線上に持つタイプであり、2段目は切り込みの片側が長いタイプである。横板は接合関係が認められることから、1枚の部材を転用したものと推定されている。井戸底には1枚の板(転用材)を薄く二つに割ったものを据えている。北側に矢板が打ち込まれており、砂地に井戸枠を設置する際に流入する土(砂)を留めるためと推定されている。掘り方からは木屑が検出されたので、その場で製作された可能性があるという(北野博司氏教示)。

金沢市戸水C遺跡F区4号井戸（第11図5）

センター1986年報告。井戸枠は8枚2段が存在した。東西方向に第12図最下段例を据えている。切り込みは片側が長いタイプである。上部には縦板が多角形状（内法50cm）に巡らされていた。

金沢市戸水C遺跡E区2号井戸（第11図6）

センター1986年報告。井戸枠は9枚3段が存在した。第12図最下段例が2枚存在する。切り込みは片側が長いタイプである。2段目上側に切り込みが見られ、それに第12図最上段例を組合せたと思われる。2枚の板材が接合する可能性がある。

金沢市八日市サカヤマツ遺跡B地点井戸（第11図7）

金沢市教育委員会1990年報告。井戸枠は16枚4段が存在し、南・北辺には第12図最上段例がある。最下段例はなく、横板16枚は切り込みが同じ長さのタイプである。各段は東西方向を据えてから南北方向で合わせ、最上段を東西方向で押さえる。横板は3枚、縦板は1枚が転用材である。

金沢市千木ヤシキダ遺跡（第11図9）

金沢市教育委員会1991年報告。井戸枠は上下二段構造となっている。上段に横板組を据え、下段は縦板組隅柱横棧どめを据えている。井戸枠は7枚2段存在したが、切り込みで組合せず、端を直角に合わせて掘り方の土で支えている。他の井戸の枠を転用したものであり、転用前の井戸枠内法は約1m（97・98・100・103・104cm）である。横板は切り込みの長さが同じタイプ5枚、片側が長いタイプ1枚、切り込みが短い第12図最下（上）段例1枚である。

小松市漆町遺跡フルミヤ地区1号井戸

センター1986年報告。井戸に関係する横板が遺構検出面より1.3m下に1段存在した。両端を凹状に加工した南北方向の横板と両端を凸状に加工した東西方向の横板が組み合わされている。横板が未報告なので詳細は不明である。南北方向の板は長さ94cm、幅13cm、厚さ4cmである。東西方向の板は長さ84cm、幅10cm、厚さ4～4.5cmである。

2 横板組井戸の特徴と問題点

石川県内の横板組井戸を集成してみると、以下の特徴・問題点などが指摘できる。この指摘が今後の横板組井戸の調査研究に少しでも役立てば幸いである。

特徴1：材料は転用材を利用した可能性がある。（横板：第11図2・4・7・9、縦板：7・9、底板：1・4）。特徴2：横板に接合関係が認められるものがある（第11図4・6）。特徴3：設置場所で横板を加工した可能性がある（第11図2・4）。特徴4：最下段を東西方向に据える例が多い（第11図1・2・5・7・9内枠）。特徴5：公的性格を持つ可能性がある遺跡に存在する例が多い（大町C遺跡、加茂遺跡、戸水C遺跡、千木ヤシキダ遺跡、寺家遺跡）。

問題点1：横板の接合関係の有無を観察する必要がある（特徴2の確認）。問題点2：掘り方の土、井戸枠裏込めの土に横板の切り屑の有無を観察する必要がある（特徴3の確認）。

IV 河北潟と周辺の古代遺跡 (第13図)

加茂遺跡の西に広がる河北潟は、潟湖と呼ばれる海岸近くの浅い湖で、もと入江地形であったものが、北から張り出してきた砂丘列によって閉塞され、潟となったものである。⁽¹⁾ この潟は昭和45年に大半が干陸されたが、それ以前は周囲25km、面積25km²を測る北陸最大の潟湖であった。このような潟湖は日本海沿岸に少なからず存在しており、石川県内でも河北潟のほかに邑知潟、赤浦潟や加賀三湖がある。図示した湖岸線の復元は斎藤晃吉氏の研究⁽²⁾を参考にしたが、正保3年(1646)の『加賀国絵図』をはじめとする近世の絵図にみえる「フゴ」(水位の上昇によって水面化する低湿地)の位置からも古代における湖面の範囲を推定することが可能である。

潟の北部はほとんど低湿地で遺跡の立地はみられない。宇ノ気町横山には大きな「フゴ」があり、その北の高松町内高松にも「フゴ」があったことが絵図類によって知られる。これらの「フゴ」については宇ノ気川水系と関わって押水・高松窯跡群産の須恵器搬出ルートとして利用されたのではないかとの推論⁽³⁾もある。横山は『延喜式』兵部省式にみえる加賀国所在の駅「横山」の遺称地でもある。横山駅は「フゴ」の西側に存在した可能性がある。

潟の東部、加茂遺跡周辺をみると、7～8ヶ所の遺跡が集まっている。東部の遺跡立地は第13図に示した明治42年測量の地図では標高5mの等高線付近もしくはそれより高い所に限られており、津幡川以南では、現在のJR北陸線近くに限られている。このことは地理的・地形的な制約のほかに、北陸道の位置とも少なからず関わるものであろう。大田スタンダ遺跡や今町A遺跡が7世紀末、加茂遺跡が8世紀前半という加賀郡の古代遺跡としては早い出現時期を示していることも、北陸道の設置時期との関係で理解したい。

潟の南部には戸水C遺跡を核とする戸水遺跡群が展開しており、立国時の加賀を考えるうえで重要な地域となっている。戸水C遺跡は潟湖の出入口に立地している。潟湖周辺、とくに出入口における遺跡の集在とその重要性については森浩一氏が指摘⁽⁴⁾しており、戸水C遺跡は森氏のいう「潟港」を備えた遺跡といえよう。同遺跡は8世紀代より営まれるものの、盛期は9世紀前半以降である。また、この遺跡群のなかでは金石本町遺跡が注目される。立地からみて港の機能をもっていた可能性があり、戸水C遺跡との関係や遺跡群の中での位置づけに興味もたれる。

このほか南部の東側には千木ヤシキダ遺跡が立地する。10世紀に盛行するもので、戸水C遺跡以降の北加賀における中核遺跡と捉えられている。

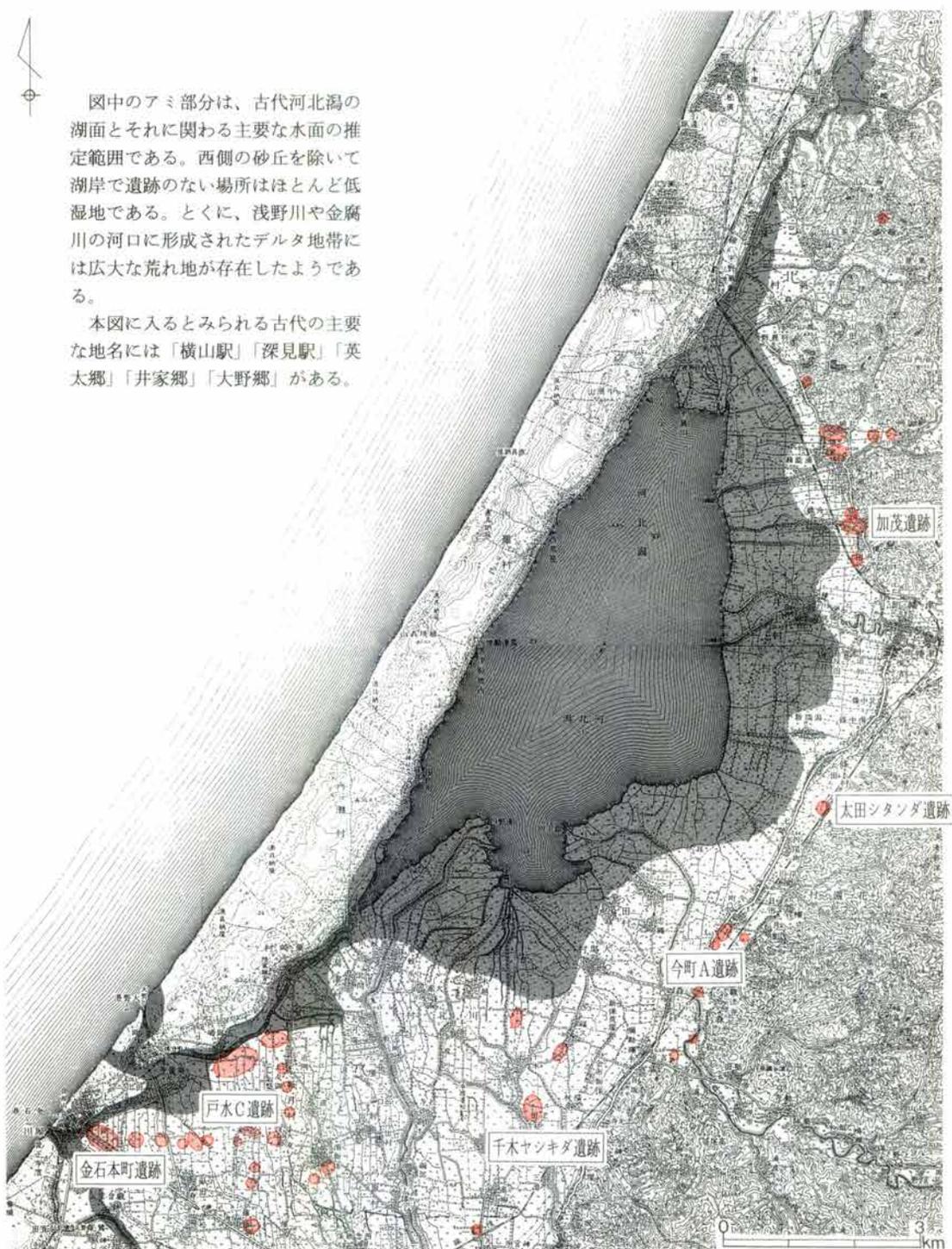
注

- (1) 粕野義夫「日本海と潟湖」『いしかわ人は自然人』 橋本確文堂企画出版室 1992 金沢。
- (2) 斎藤晃吉「河北潟々縁開墾史」『石川県宇ノ気町史』 宇ノ気町役場 1970 石川県宇ノ気町。
- (3) 出越茂和編『千木ヤシキダ遺跡』 金沢市教育委員会 1987 金沢。
- (4) 森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえての交流』 中央公論社 1986 東京。



図中のアミ部分は、古代河北潟の湖面とそれに関わる主要な水面の推定範囲である。西側の砂丘を除いて湖岸で遺跡のない場所はほとんど低湿地である。とくに、浅野川や金腐川の河口に形成されたデルタ地帯には広大な荒地が存在したようである。

本図に入るとみられる古代の主要な地名には「横山駅」「深見駅」「英太郷」「井家郷」「大野郷」がある。



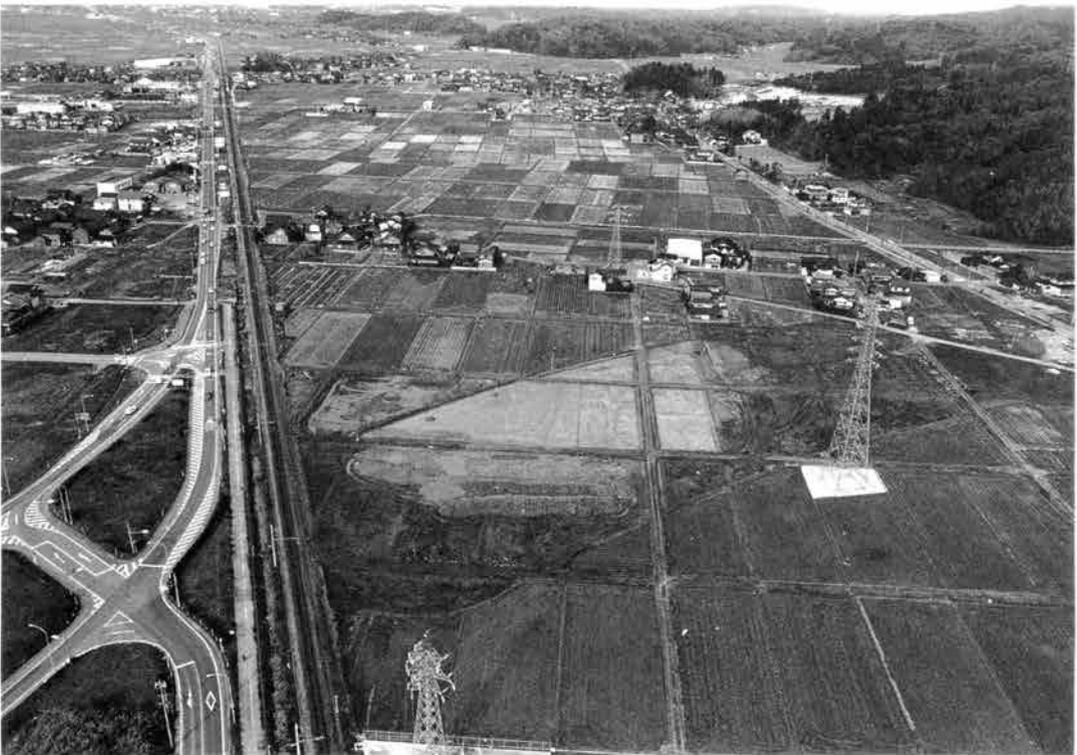
第13図 河北潟と周辺の古代遺跡分布図

(S = 1 / 100,000 原図は明治42年測図の 1 / 50,000地形図「津幡」「金澤」)

圖 版



(1) 空からみた第1次調査区（西から）



(2) 空からみた第1次調査区（南から）

図版第2 第1次調査 空中写真





(1) 掘立柱建物跡 (7D・E区、東から)



(2) 第1号井戸跡 (東から)



(1) 第1号井戸跡（南から）



(2) 第1号井戸跡（南西から）



(1) 大溝 (10G・H区、東から)



(2) 小溝群 (10I区、北から)

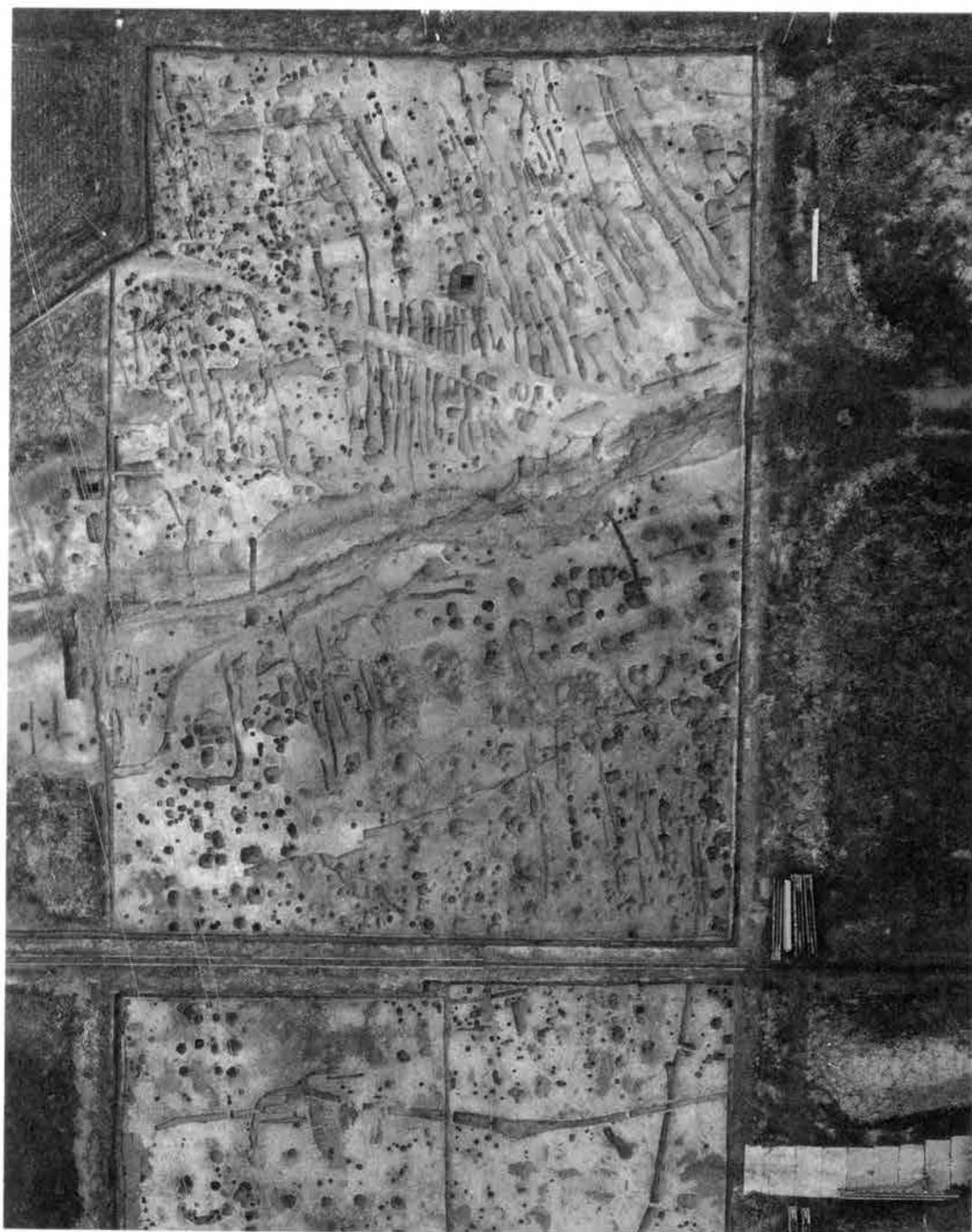


(1) 空からみた第2次調査区(西から)



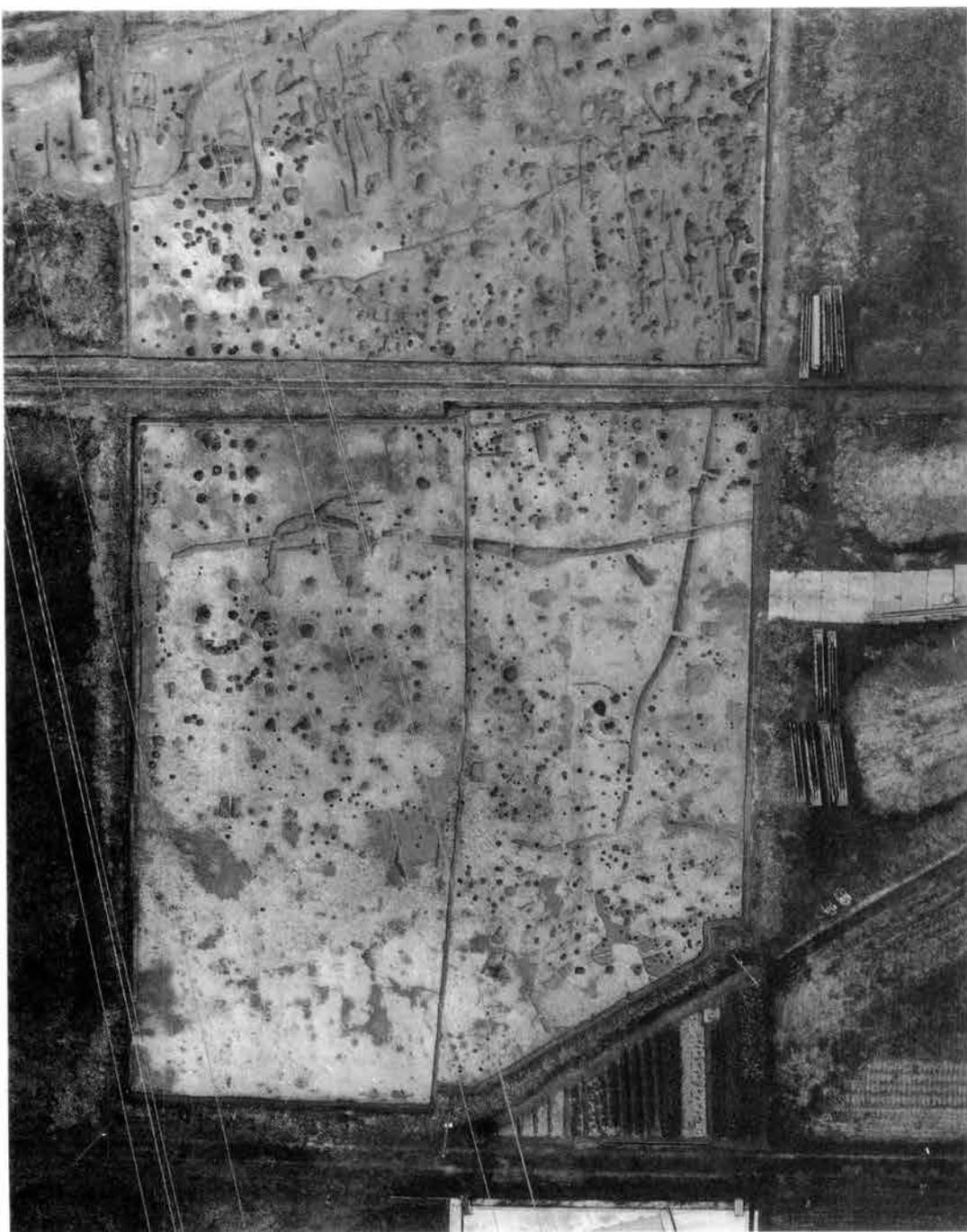
(2) 空からみた第2次調査区(東から)

図版第7 第2次調査空中写真



北半部

図版第8 第2次調査空中写真



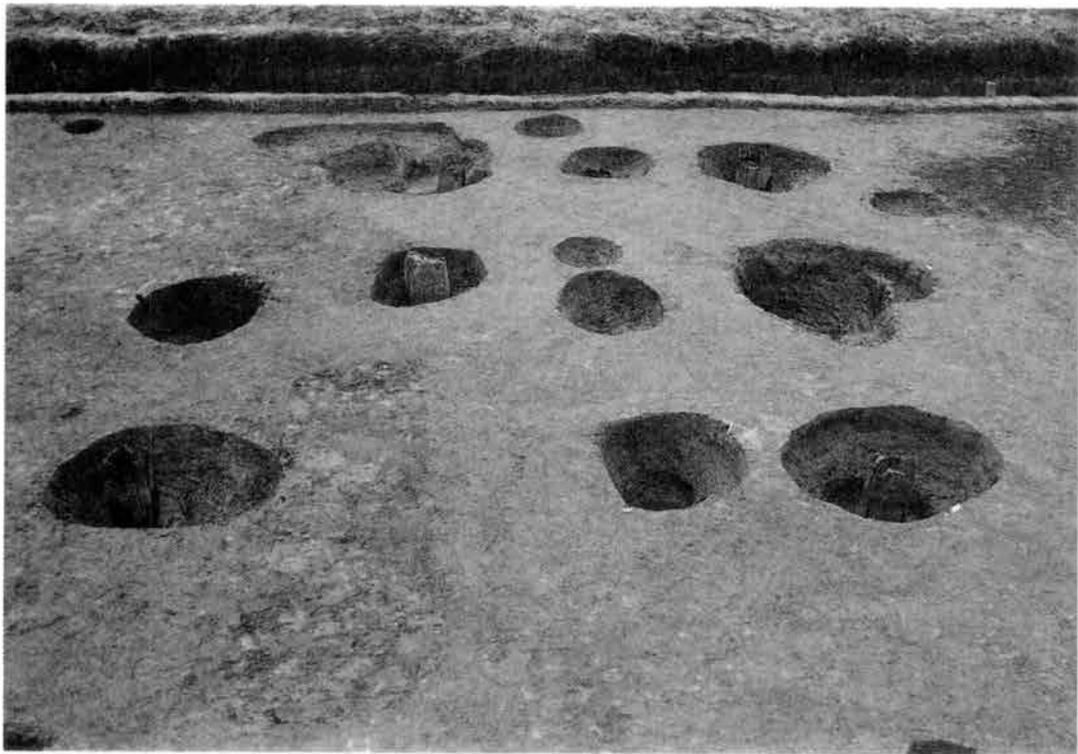
南半部



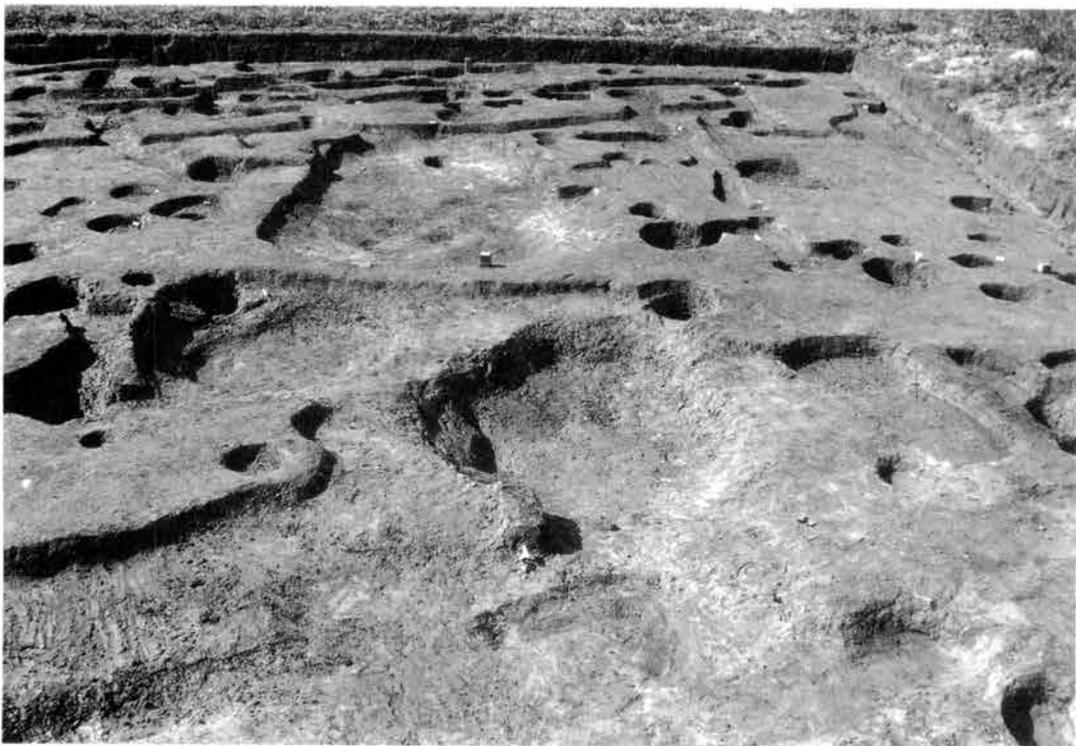
(1) 掘立柱建物跡 (13F・G区、北から)



(2) 掘立柱建物跡 (12C・D区、東から)



(1) 掘立柱建物跡 (11E区、南から)



(2) 土坑群 (11・12J区、東から)



(1) 第 2 号井戸跡 (東から)



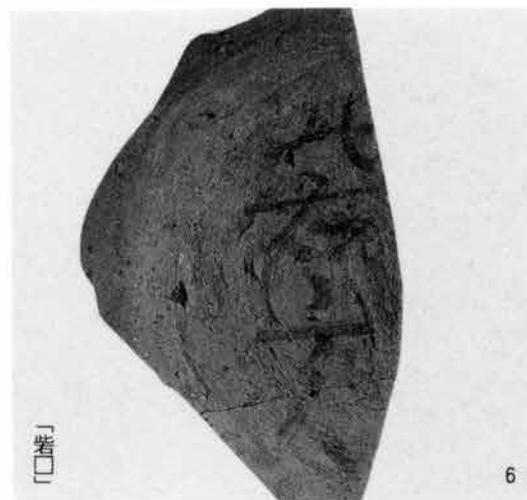
(2) 第 2 号井戸跡 (東から)



(1) 大溝（東から）

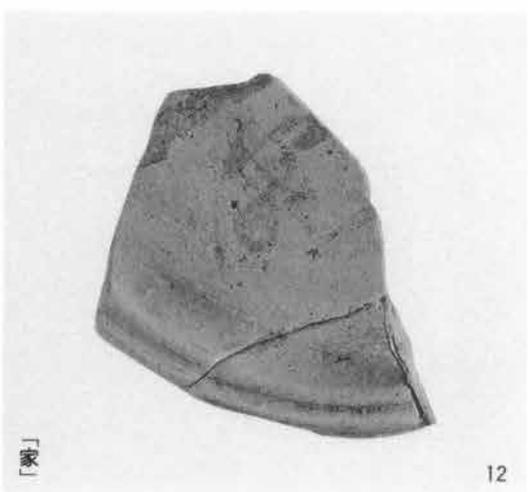
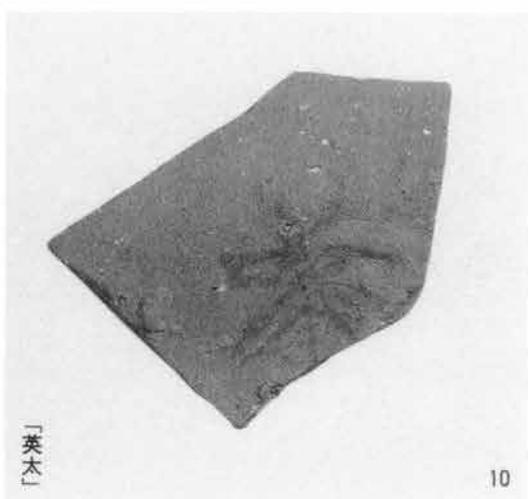
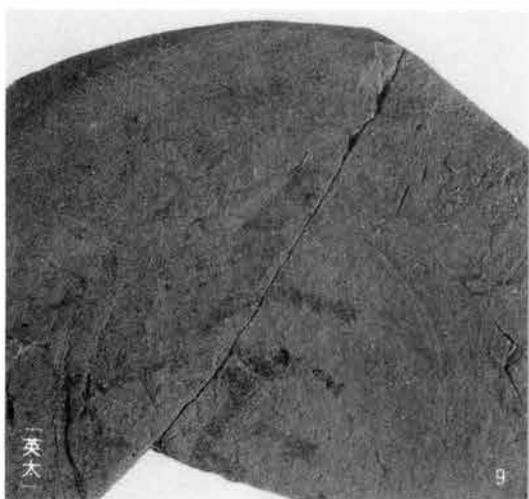


(2) 大溝肩部の土器群（11G区、北から）



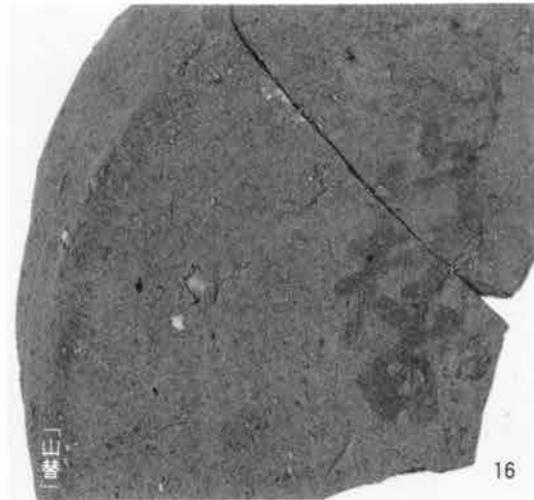
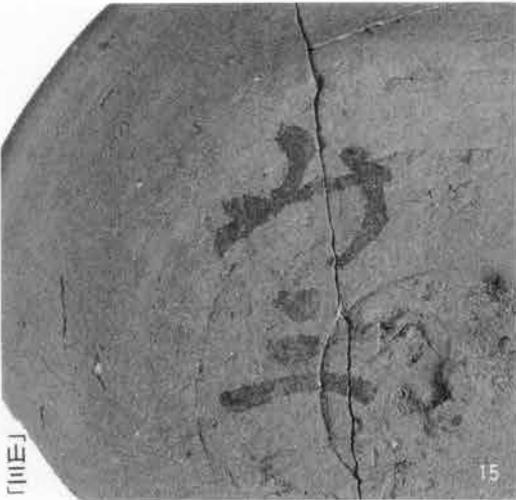
大溝出土墨書土器

(縮尺不同)



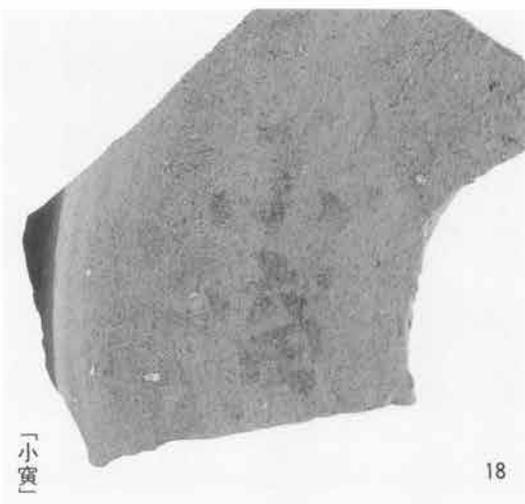
大溝出土墨書土器

(縮尺不同)



大溝出土墨書土器

(14・17は1/2、他は縮尺不同)

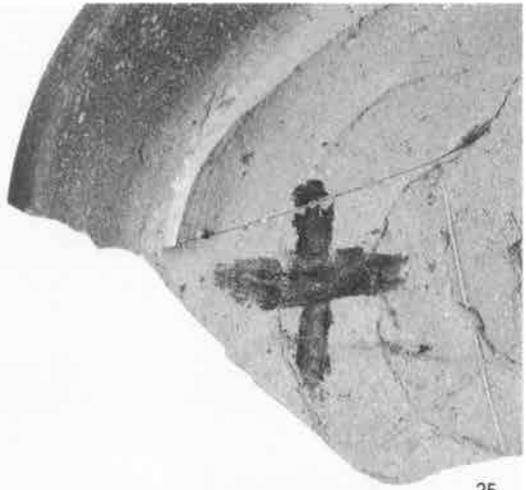


大溝出土墨書土器・転用硯

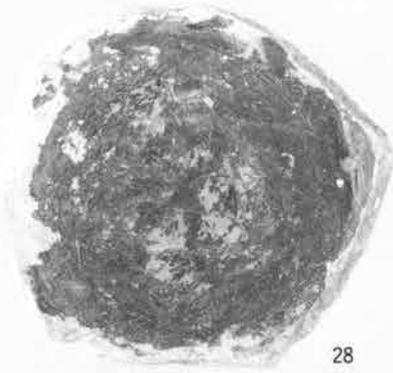
(縮尺不同)



24



25



28



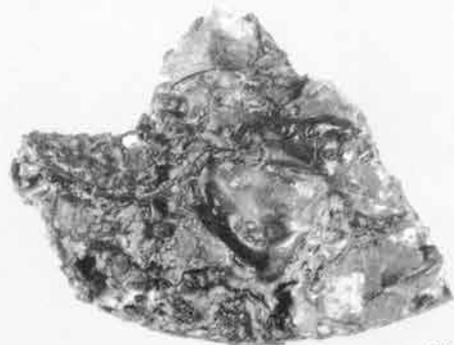
26



27



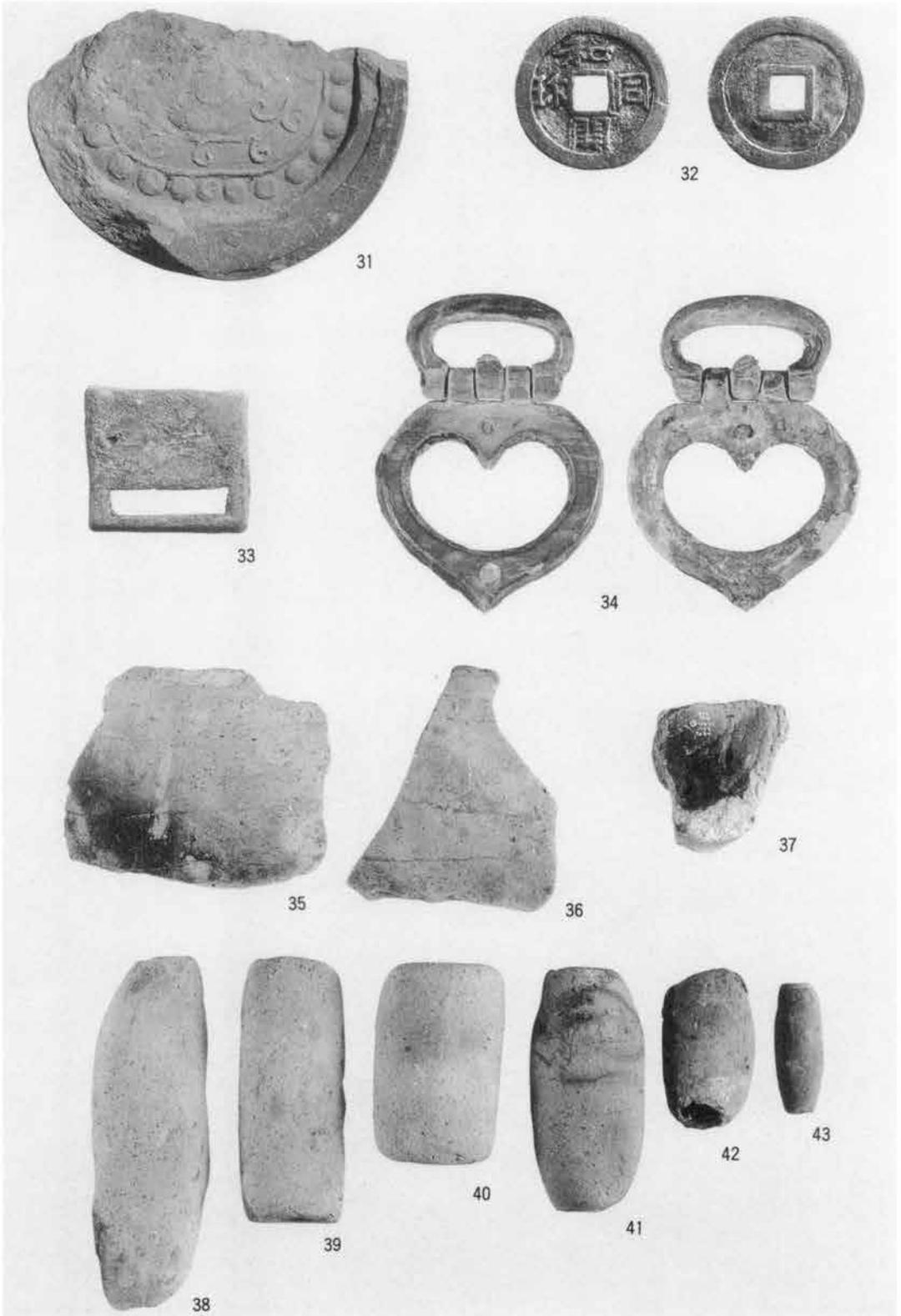
29



30

漆書土器・漆付着土器・漆桶

(28・29は1/2、30は1/1、他は縮尺不同)



軒丸瓦・銭貨・金属製品・製塩土器・土錘

(31・35~43は1/2、32~34は1/1)

加 茂 遺 跡

—第1次・第2次調査の概要—

平成 5 年 3 月 20 日 印刷

平成 5 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

石川県小松市島田町イ85-1

〒923 電話 (0761) 21-5150番

印 刷 北 國 書 籍 印 刷 株 式 会 社

石川県金沢市香林坊2丁目5-1
